

表象メディア論A 作品内に潜む「作品の背景」

まず、pecoraped 作の映像『迷走赤ずきん』(2007)を見よう。作者の pecoraped は2人組の映像ユニット(杉殿育恵と西尾都)で、この作品がカタロニア映画祭で入賞した当時、彼らがまだ広島市立大学の学生だったことなどが話題を呼んだ。タイトルからも推測できるとおり、ペロー(1628-1703)原作の童話「赤ずきん」をデフォルメした作品だが、作品の魅力は、「赤ずきん」物語がユーモラスかつスピーディに展開している点だけでなく、描かれた図像から少なくとも以下の複数の物語への参照がうかがわれる点も含まれよう。

- ✧ マザーグース(英国の伝承童話)の「3匹の子ぶた」
- ✧ ロシア民話の「大きなかぶ」
- ✧ ルイス・キャロル(1832-1898)の「不思議の国のアリス」

さて、当科目の期末レポートを書く際に「映像の Making Video が手に入らない」という理由で、選定対象にできないと嘆いている学生が多いようにみうけられる。

しかし、作品分析に、本来、Making Video の存否は関係ない。むしろ、作品そのものから、作品の背景をいわば「勝手に」推測し、作品の魅力をあぶり出すことこそ、作品分析の醍醐味である。

ブレヒトの戯曲はすべて、暗に、解読を強いる。(中略)彼の演劇において、この意味体系の役割は、一つの積極的なメッセージを伝達することではなく、世界が一つの解読されるべき対象であることを理解させることなのです。

(ロラン・バルト『エッセ・クリティック』、高坂和彦訳、晶文社、p.359)

今回は、このことを考えるための事例として、Procol Harum《A Whiter Shade of Pale》(1967)に潜む
チャーサーの『カンタベリー物語』(15世紀)の「粉屋の話」と、Bob Dylan《Like A Rolling Stone》
(1965)や Cocco《強く儂い者たち》(1997)に潜むホメロスの『オデュッセイア』(紀元前8世紀)の
をとりあげたい。

Procol Harum 《A Whiter Shade of Pale》(1967)

We skipped the light fandango
Turned cartwheels 'cross the floor
I was feeling kinda seasick
But the crowd called out for more
The room was humming harder
As the ceiling flew away
When we called out for another drink
And the waiter brought a tray

フロアー内で何度も
腕立て側転をした。
僕は船酔いのような気分になっていた。
でも連中はもっと踊れと挑発した。
部屋は屋根が吹っ飛ぶくらいに
ざわめいていた。
僕たちがもう一杯注文したら
ウェイターはトレイを運んだ。

And so it was that later
As the miller told his tale
That her face, at first just ghostly,
Turned a whiter shade of pale

だからそれは後のことだった
粉屋が彼の話をしたのは。
彼女の顔は最初呆然としていたが
だんだん青ざめていった。

She said, "There is no reason
And the truth is plain to see."
But I wandered through my playing cards
And they would not let her be
One of sixteen vestal virgins
Who were leaving for the coast
And although my eyes were open wide
They might have just as well been closed

彼女は言った「わけが分からないわ、真実は明らかなのに」
でも僕はトランプをしながら
別のことを考えていた。
僕は彼女を、海岸へ向かっている16人のウェスタの乙女の
一人にさせないと。
僕の目は開いていたが、
僕たちが最期を迎える時のように目を閉じていたかもしれない。

And so it was that later
As the miller told his tale
That her face, at first just ghostly,
Turned a whiter shade of pale

だからそれは後のことだった
粉屋が彼の話をしたのは。
彼女の顔は最初呆然としていたが、
だんだん青ざめていった

She said,
"I'm here on a shore leave,"
Though we were miles at sea.
I pointed out this detail
And forced her to agree,
Saying, "You must be the mermaid
Who took King Neptune for a ride."
And she smiled at me so sweetly
That my anger straightway died.

彼女は言った
「私は家にいるわ」
でも実際は沖にいた。
だから僕は彼女に子細を説明し、
彼女に「君は人魚に違いないよ、
海の神ネプチューンに乗る人魚だ」
という話に同意させた。
彼女がとても悲しそうに僕に微笑んだので、
僕の怒りは、あっという間に消えた。

And so it was that later
As the miller told his tale
That her face, at first just ghostly,
Turned a whiter shade of pale

だからそれは後のことだった
粉屋が彼の話をしたのは
彼女の顔は最初呆然としていたが
だんだん青ざめていった

If music be the food of love
Then laughter is it's queen
And likewise if behind is in front
Then dirt in truth is clean
My mouth by then like cardboard
Seemed to slip straight through my head
So we crash-dived straightway quickly
And attacked the ocean bed

もし音楽が愛の糧であるのならば
笑いこそがその女王だ。
まるで後ろが前であるというように、
汚れは、本当はきれいなのだ。
その頃には僕の口はボール紙のようで、
僕の頭から真っ直ぐに滑り落ちるように思えた。
いよいよ僕たちは急に、
真っ直ぐに潜航して海というベッドにぶち当たった。

And so it was that later
As the miller told his tale
That her face, at first just ghostly,
Turned a whiter shade of pale

だからそれは後のことだった
粉屋が彼の話をしたのは
彼女の顔は最初呆然としていたが
だんだん青ざめていった。

「ソングライター・インタビューズ プロコル・ハルムのキース・リード」

『SONGFACTS』 2009年4月2日収録) <http://barcarolle2009.cocolog-nifty.com/blog/2010/08/post-05c2.html>、バルカローレ訳、2010年8月3日。

——作詞家がバンドの正式メンバーである例をほかにご存じですか？

キース： 初期のキング・クリムゾンにいたピート・シンフィールドがそうだったように思う。今思い浮かぶのはそれくらいだけれど。プロコル・ハルムについて言えば、バンドを一から立ち上げたのはゲイリー（訳注・ゲイリー・ブルッカー）と僕だ。あれは相当変わった立場だったね。作詞家がバンドの結成から何まで責任を負うなんてケースは特に。

——歌をジグソーパズルのようなものにたとえてらっしゃったのをどこかで読んだことがあります。パズルのピースを集めているのだと。

キース： ああ、それはソングライティングの初期の頃についての言葉だ。インスピレーションであれ何であれ、パズルのピースとして受け取ったものを僕は歌として感じるんだ。この場合で言うと、まず'Whiter Shade of Pale'というタイトルがひらめいた。そしてこう思った。ここに歌がある、と。ピースがうまくはまるようにパズルを完成させていく。「絵」を見つけれれば、残りのどのピースがどこにはまるかは自ずと分かる。

——私はいつも「粉屋が話を語った」(the Miller told his tale) が「鏡が話を語った」(the mirror told his tale.) に聞こえていました。女が鏡を見ているときに起こったことなのだとずっと思っていました。

キース： そちらの方がよかったかもしれないね（笑）。

——あなたはおそらくチャーサーか何かをお読みになっていたと思うのですが。

キース： いや、読んでいないよ。みんなすぐに訊きたがるんだよね。「ああ。チャーサーの『粉屋の話』だ」ってみんな思うんだ。僕は生まれてこの方『粉屋の話』は一度も読んだことはない。潜在意識のどこかでもしかしたら知っていたのかもしれない。でもチャーサーから引用した意識がなかったことは確かだ。本当に。

チャーサー『カンタベリー物語』 梶井迪夫訳、岩波文庫、1973、上 pp.148-172.

この大学生はしゃれ者ニコラスと呼ばれ、秘めたる恋や恋の楽しみを心得ていました。その上、彼は抜け目がなく、秘め事が好きで、見た目は乙女のようなやさ男でした。(中略) 大工は最近細君を迎えたばかりで、この細君を命以上に愛しておりました。細君の年齢は18。大工は焼き餅焼きで、細君を窮屈にもかごの中に閉じ込めておりました。というのは、細君は若くて自由奔放、一方旦那のほうは年をとって、細君が不倫をしてはいないかという疑いをいつももっていましたから。(中略)

ニコラスは言いました。「大学生たるもの、大工をごまかすこともできないようじゃ、よっぽど時間を無駄に過ごしてきたことになるさ」(中略) ニコラスは言いました。「実はわたしが占星術で煌々と照る月を見つめていた際

に、次の月曜日の夜の九時に雨が降ってきて、それがすごい豪雨で、ノアの洪水もその半分にも及ぶまいということを知ったのだ。この世も一時間とたたぬ間にすっかり沈んでしまうほど、それは恐ろしいばかりの雨だ。(中略) 昔々、ノアが細君を舟に乗り込ませる前に、どんなに苦労をしたか聞いたことがないか？(中略) 3つのコネ鉢を手に入れたら、天井高く吊すんだ。(中略) 細君とお前さんはずっと離れ離れになって天井からぶら下がっていなくちゃならん。あんたがたの間に罪な行いなんぞないようにな。行いだけじゃなく、見ることだってだめなんだ。そういうお告げがあったのさ。」

Cocco 《強く儂い者たち》

作詞・作曲：Cocco（真喜志智子、1977-）

愛する人を守るため
大切なもの築くため
海へ出たのね
嵐の中で戦って
突風の中生きのびて
ここへ来たのね

この港はいい所よ
朝陽がきれいな
住みつく人もいるのよ
ゆっくり休みなさい
疲れた羽根を癒すの

だけど飛魚のアーチをくぐって宝島が見えるころ
何も失わずに
同じでいられると思う？

人は弱いものよ
とても弱いものよ

愛する人の未来など
遠い目のまま言わないで
声が聞こえる？
私の部屋へいらっしやい
甘いお菓子をあげましょう
抱いてあげましょう

固い誓い交わしたのね
そんなの知ってるわ
“あんなに愛し合った”と
何度も確かめ合い
信じて島を出たのね

だけど飛魚のアーチをくぐって宝島に着いたころ
あなたのお姫様は
誰かと腰を振ってるわ

人は強いものよ
とても強いものよ

そうよ飛魚のアーチをくぐって宝島がみえるころ
何も失わずに
同じでいられると思う？

きっと飛魚のアーチをくぐって宝島に着いた頃
あなたのお姫様は
誰かと腰を振ってるわ

人は強いものよ
そして儂いもの

『イリアス』『日本大百科全書(ニッポニカ)』

ホメロスの作とされる古代ギリシアの英雄叙事詩。全編 1 万 5693 行、24 巻に分かれるが、この巻別は後世（前 3 世紀ごろ）に由来する。制作の年代は紀元前 8 世紀の中ごろとするのが通説である。題名は「イリオスの歌」の意で、イリオスはトロヤの別称である。10 年にわたるトロヤ攻防戦も終末に近いころの、約 50 日間のできごとを扱っている。

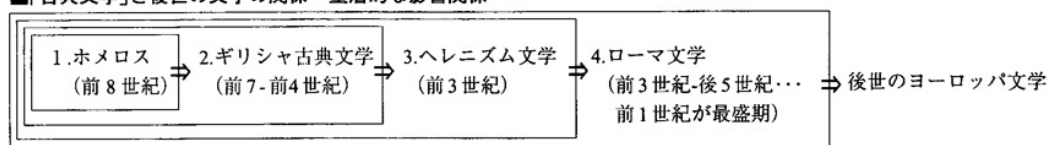
「オデュッセイア」『日本大百科全書(ニッポニカ)』

『イリアス』とともにホメロスの作とされる古代ギリシアの英雄叙事詩。今日では『イリアス』より約一世代遅れて紀元前 8 世紀末に制作されたもので、その作者も『イリアス』の作者と同一人ではないと考える学者が多い。『イリアス』より約 3000 行短く、1 万 2000 行にわずかに足りない。『イリアス』同様 24 巻に分かれ、ギリシア語アルファベット 24 字で順序を示す。題名は「オデュッセウスの歌」の意で、トロヤ落城後、さらに 10 年にわたって各地を放浪した英雄オデュッセウスを主人公とした冒険譚である。

物語は放浪生活も終わりに近く、オデュッセウスはニフのカリプソに愛され、オギュギエの島に留められてすでに 7 年になる時点から始まる。一方オデュッセウスの故国イタケでは、彼はすでに死亡したものとして、近隣の貴族の若者たち多数が妃ペネロペイアに求婚し、屋敷に居座っては宴遊に明け暮れ、妃とひとり息子のテレマコスとを悩ましている。やがてオデュッセウスは故国へ帰り、テレマコスと力をあわせて悪虐な求婚者たちをことごとく討ち果たすまでの、約 40 日間のできごとが詩の内容である。

宮城徳也『ギリシャ・ローマ文学必携』早稲田大学文学部、2006、p.12; pp.52-53; pp.92-93

■「古典文学」と後世の文学の関係＝重層的な影響関係

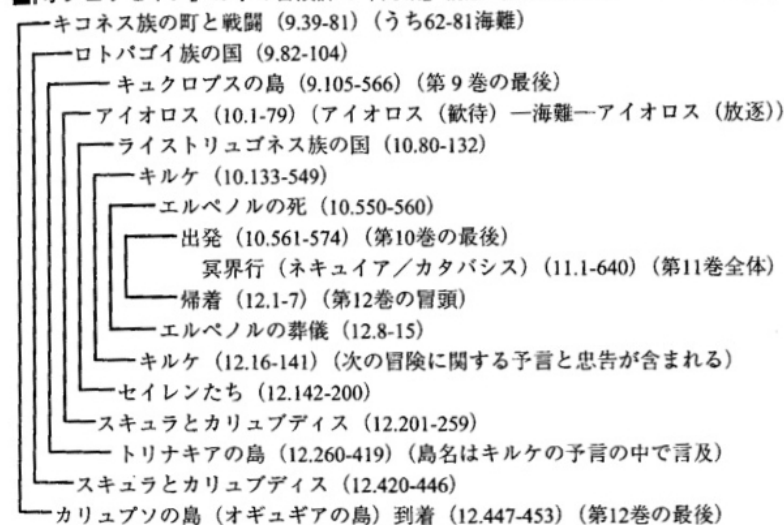


『オデュッセイア』全体の構成は、次の三つの部分から成ると言つてよい。

1. テレマコスの「父親探し」(第1-4巻)
2. パイエクス人の島で語られるオデュッセウスの「冒険譚」(第5-13巻)
3. イタケ島での求婚者たちへの報復と妻との再会(第14-24巻)

『オデュッセイア』の構成には全体としても大体の、「円環」構造(ring composition)が見られる。特に顕著な例として、第9巻から12巻までの「冒険譚」における緊密な「円環」構造を図示すると、以下のようになる。

■『オデュッセイア』の中の冒険譚の「円環」構造(第9-12巻)(トロイア→カリュプソの島)



ルチャーノ・デ・クレシェンツォ『オデュッセイアを楽しく読む』(Nessuno, *L'Odissea raccontata ai lettori d'oggi*, 1997) 草皆伸子訳、白水社、1998、p.64.

『オデュッセイア』に登場する女性は全部で四人。ペネロペイア、キルケ、カリュプソ、そしてナウシカアだ。ペネロペイアは40歳を越えた女性で、悲しみにやつれ、人生を楽しむ気持ちなど微塵も持ち合わせず、泣いてばかりいる。昼間は厚いヴェールで顔を覆い、夜になると布をほどいて時間をつぶす。キルケは正反対だ。周知のように破廉恥で、早い話が売春宿の女主人だ。配下の女性たちの春を売るだけではなく、彼女自身も男とみれば手当たり次第に体を安売りする。ところが、じつはキルケより手に負えないのがカリュプソなのだ。かわいそうなオデュッセウスを7年ものあいだ幽閉し、たとえ1分たりとも放そうとはしなかった。四六時中愛しているかと尋ね、四六時中自分はものすごく愛していると言い続けた。ナウシカアはありがたいことに、若くおおらかで美しく、一糸まとわぬ姿で玉遊びに興じるだけだ。

ペネロペイア……クレシェンツォ『オデュッセイアを楽しく読む』153頁。

求婚者たちはペネロペイアと再婚して新王になるために、さまざまな贈り物をした。が、貞淑な彼女は全員に対して再婚の申し出を断った。というよりも、返事を長引かせている。老ラエルテスに贈るために立派な布を織り上げてからでなければ、返事はしないと云ったのだ。そして、昼間布を織っては、夜になると昼間織った分を解くというからくりを始めた。この巧妙な作戦を始めてから、すでに3年が経っている。

キルケ……クレシェンツォ『オデュッセイアを楽しく読む』153頁。

キルケはオデュッセウスの耳にこう囁いた。「わが勇敢なるオデュッセウスよ、あなたが進むべき航路を教えあげましょう。そして、神々がお決めになった以上の苦難を経験せずともすむように、いくつかの策を授けてあげましょう。まず、船はある不思議な島の近くを通過するはずだ。その島にはセイレンと呼ばれる、それはそれは美しい女たちが住んでいます。覚えておきなさい。彼女たちの声を聞いた者は、二度と再びわが家を見ることはないのです。魔性の女たちは、甘い歌声で海の旅人を虜にし、島へと呼び寄せます。でも島に近づくと、そこには海面すれすれに鋭く尖った岩が無数に隠れていて、船をことごとく難破させてしまいます。

カリュプソ……クレシェンツォ『オデュッセイアを楽しく読む』153頁。

「心優しきカリュプソよ、誰もそなたがペネロペイアに劣っているなどとは言っていない。美しさにおいても、感性の豊かさにおいても、そなたのほうが数段上。でも、それと私が彼女をこの手で抱き締めたいという思いとは別のことなのだ。長い間いっしょに過ごせば、情というものがわく。それに、覚えているだろう？ 私にはまだ顔さえ知らぬ息子がいる。そして、言うまでもなく、国には私の帰りを待ちわびている大勢の友もいるのだ」
「どうして、あなたがた人間は遠くにいる人への愛情をそんなに大切に思うのでしょうか。近くにいる人の愛にはちっとも気がつかないのですね。(中略) 愛するオデュッセウスよ。私とすれば、あなたは決して年を取ることはないのですよ。それに、もしあなたがオギギエに残るというのなら、私は最高神ゼウスに永遠の若さを与えてくれるよう頼みましょう。私とすれば、いつまでも若く美しくいられるのです。いっぽう、彼女のもとに帰れば、間もなく死ぬか、運が好くてもせいぜい長生きして惨めな老後を過ごすことになるのですよ」